

---

# 真純くんの事情

内海 さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真純くんの事情

### 【Nコード】

N0156Z

### 【作者名】

内海 さくら

### 【あらすじ】

結婚を意識しながらも別れてしまった元恋人が住む街に、買収の仕事をするために戻ってきた真純。彼女の婚約を知り愕然とする中、買収相手である『はなみ花屋』の店主にある想いが芽生え始める。『私の彼は副社長』真純サイドの物語、そして、現在連載中の2nd seasonの伏線となります。初めてのお客様は、『私の彼は副社長』からお読みになられることをお勧めします。

## 第1話

『その駅前商店街の土地を買収してくれ。  
資料は届いているだろう?』

突然の電話で新たな土地買収を告げてきたFIE社長、おんだまこと恩田真人。  
彼の話聞きながら、ノートパソコンに送られてきたファイルに目を通した僕は  
驚きの声を上げた。

「父さん、寂れた商店街の土地を  
こんな高い値段で買収しろと言うんですか?」

『父さんじゃない、社長だ。高いが、いつものことだろう?』

「あ、はい社長。にしても…」

どの店も多額の借金ばかり、  
この資料から見ると、

この商店街の真北にある駅北口エリアの方が大型商業施設もあり  
集客も見込めるのに。

携帯電話を耳に挟み、不満げな表情でページを進めていると、  
父の呟くような声が聞こえてきた。

『実はな、真純。もう買収を始めているんだ』

「はっ？」

その地域は、元々父の買収担当。

身体が弱い妻と娘に寂しい思いをさせるわけにはいかないと、  
自宅近くの会社を拠点にあちこちと動いているのだ。

「だったら、最後まで社長がしてください」

『いや、それがなあ……真純。ロスにいい土地を見つけたんだよ』

ようやく、父の魂胆が分かった。

父はどちらかというと、地味に仕事をするのが嫌いな人だ。

テレビや雑誌に出て知名度を上げたり、

派手で豪華なスポーツクラブをデザインすることを好んだ。

そして今度は、海外進出というわけだ。

「そついうことですか」

『そついう訳だ、副社長。』

……というより、影の社長と言ったほうがいいかもな。真純』

「本当だよ」

思わず、本音が出ていた。

買収の業務の合間、普段は社長がするような業務も全てこなしている。

そのお陰で、食事や休憩時間なども取れず、移動時間にさつと済ませているのだ。

そんな多忙なスケジュールのせいで、プライベートは散々なわけで。

「年をとっても僕が結婚できなかつたら、父さんのせいだから」

『あれ、こないだまで付き合っていた彼女はどうした？』

「とつくの昔に別れたよ」

「へえ、結婚まで決めてたのに」

ふと、亜紀の顔が浮かんだ。

—— 平井亜紀 ——

結婚まで考えた元恋人。

亜紀とは大学時代、友人が企画したコンパで出会った。  
大学のパンフにモデルとして起用されたこともあるひとつ年上の彼女は、

美貌頭脳ともに学内で、彼女に一目置いていた僕は  
コンパを企画した友人の手を取り、飛び上がるほどに喜んだ。  
もちろんコンパでは、彼女をターゲットに絞った。  
さり気なくプラチナ席である彼女のサイドをとり、  
談笑しながら彼女の好きな話題を探る。

ブランド品が好きで、年に一度はヨーロッパへ旅に出るという彼女の  
話から、

僕の知っている限りのところで言葉を合わせてゆくと、  
尊敬の眼差しで見つめられた。

その場は、周りの男たちが羨むような好感触な雰囲気だった。  
ふたりの世界に入り込めないために向けられる  
痛いぐらいの羨む視線を浴びながら、優越感に浸り続けた。

もちろん僕自身も、高嶺の花の彼女にあと数センチ……そういう意識  
だった。

2次会に行き、ふたりきりになった時を見計らい  
彼女の携帯へ僕のメルアドを登録することに成功する。  
だが……。

「あなた、素敵だけど女性の扱いが上手すぎて怖いね。  
付き合ったら女性関係で苦労しそうね」

なんて、まるで占い師のような言葉を投げかけられ  
おまけに、このメルアドは破棄していい？とまで言われたのだ。

もちろん力チンと来た。

思わせぶりの雰囲気を作り上げ男をその気にさせながら、いきなりどん底に落とす。

付き合っても無いのに、未来の人生を決めつけようとする彼女、そんな尖った鼻をへし折りたくなった。

悪く言えばゲーム感覚にも似た気持ちだった。

「へえ。じゃ、その言葉が本当かどうか試してみないか。火傷しないくらいに付き合ってみればいいんじゃないの？」

「試す？」

「そう…例えば、気に入った服が見つかった時、君はどうする？欲しいなら手にとった後、鏡を覗いて自分に合うかどうか品定めするだろう」

「あなたを品定めしていいってこと？」

「ああ、どうぞ」

お客に物を売る時、まずは手に取らせ触れさせることが第一段階だ。品物そのものに興味を持ってもらう必要がある。

亜紀は、意外な提案に黒い瞳を大きく開け驚いているようだ。

「ずいぶん、自分に自信があるようね。そんなこと初めて言われたわ」

「そう？自分というよりも君を大切にする自信があるだけだ」

「そういうところが、怪しいのよ。女性慣れしてるみたいで」

「失礼だな。詐欺師みたいじゃないか……まっ、いいさ。  
また会ってみたくなったらメールして、待ってるから」

彼女の中に自分の存在を植えつけたら、即引かなければならない。  
そこで押し過ぎたら、悪徳の訪問販売と同じになり印象は悪くなる。

暫しは焦る気持ちを抑えて彼女の連絡を待つのだ。  
今後の展開が追い風となることを僕は神に祈った。

あんなに頑張ったコンパ、結局は自惚れた自分に気付かせてもらった形になった。  
何ヶ月も来ないメールに、彼女とのラブゲームの終息を感じ、諦める。

その後も彼女は僕にとって憧れの人に留まり、  
そうしながらも気になった女性と出会いと別れを経験した。  
だが、彼女とは意外な所から進展することになった。  
彼女が、ダイエットのためと僕の父が経営するスポーツクラブへ現

れたのだ。

当時バイトでインストラクターの仕事をしていた僕は専属のコーチとして、

彼女につくこととなった。

「平井…どうしてここへ？」

亜紀から渡された個人カルテに目を通し、

声が漏れそうなくらいに驚いた僕は彼女を見つめる。

ダイエットとは程遠い完璧な身体計測の値。

そして、彼女自身が僕を指名したのだと記載してあったのだ。

その理由は、僕が問う前に彼女の口から知らされることとなった。

「あれからも、あなたが気になって気になって仕方が無かったの」

その日の夜、いうまでもなく僕は彼女を食事に誘った。

懐かしい……。

彼女とは、一番長く付き合ったと思う。

あの、男に対し尖った性格も、彼女の過去のトラウマが原因だった  
ようで、

付き合い始めてからは彼女のこざっぱりとした明るさや  
時折見せる猫のような甘えた仕草に嵌っていった。

大学を卒業後FIEの副社長に就任したあとも、恋人関係は続いた。  
一足早く世間に出ていた彼女とスケジュールを合わせ、  
少ない時間を密に過ごし、愛を深めてゆく。

しかし、その愛に揺らぎが出てきたのはお互いが結婚を意識し始め  
た頃だった。

僕の仕事は、ますます責任の多いものとなってゆき、  
なかなか彼女の元へ帰る事が出来ず、  
すれ違いの生活から互いが互いの不安を言えないまま、  
結局は罵りあい喧嘩となり……。

なのに……。

別れて1年も経たないうちに、  
彼女のいるあの街へ帰ることになるなんて、皮肉なものだった。

『真純？…おい！』

どれだけ僕は、ぼんやりしていたのだろうか？  
久し振りに感傷に浸っていた気がする。

「もう、いいよ」

父にそう告げて、心に施錠した。

## 第2話

『まっ、モテモテの真純のことだから、  
またすぐに新しい恋を見つかるだろうよ』

父の声が、遠く聞こえてくる。

今まで、いろんな恋をしてきた。

長い間寂しい思いをすることはなく、常に隣には女性がいて僕を支えてくれた。

ただ、学生の頃は恋より部活、大人になると恋より仕事を優先してしまった結果

長く育む恋愛は経験できなかった気がする。

と言っても、恋人をないがしろにした訳ではなかったのだが。

「まったく、人のことだと思って」

呆れ返りながら、再びパソコンのモニターに視線を移した。  
だがその中に記載してある買収状況を見て思わず驚きの声を上げてしまったのだ。

「これって、もうほとんどが買収済みじゃないですか」

商店街の土地は、ほとんどが買収の同意を得ているものばかりで、あとは契約を残すだけとなっていた。

残っている土地は、現在も店舗として使われている3軒の土地のみ。駅前の一等地だ。

「凄いですね。だったら、残りの3件もさっさと終わらせてしまいましょう」

素人同然の経営状態、

借金もかさんでいるこの商店街の経営者たちを落とすのは簡単なことだ。

相場より高いお金をちらつかせ、

この商店街に居ても先は見えないことを懇々と話していけば、賢い人間ならば自分が望む判断を下してくれる。

『だがな、真純。そんなひと筋縄じゃないんだよ』

頭の中に浮かんできた計画を覆すかのように、社長は理由を話し出した。

どうやら頑なに買収を拒否している地主がいるようで、

残りの2件もそれに加わるように拒否し続けているとのこと。

「あ…このはなみ花屋がそうですか」

『ああ、私も詳しくは分からないから、担当したスタッフに直接聞いてみるといい。』

そっちの買収は終わったのだろうか？いつ本社に帰ってくるんだ』

「そうですね。建設会社との残りの打ち合わせはこっちの支配人に任せるとして、数日中には戻れます」

『じゃ、任せたぞ』

「はい」

『ああ、そうだ。いつも言っているが、地主に深入りするな。特別な感情を持ったらアウトだぞ』

買収に関して未熟だったとはいえ、まるで身内のような感情を持ってしまったがために、老夫婦の人生を変えてしまった過去がある。

買収の断念。

多額の借金苦による老夫婦の自殺……。

そんな心の傷がまだ癒えぬのを、父は分かっているようで、新しい土地買収を始める度にこうやって忠告してくれる。

売地の看板が脳裏に浮かぶ。

主が死に、灯が消えたように寂しくなった旅館の館内を呆然と歩く自分がみえる。

あの情景は、未だに僕を奈落の底へと突き落とす。

あれ以来、仕事に情を持ち込むことを極度に嫌った。

もう二度とあんな思いをしなくなかったからだ。

「分かってます。社長」

僕は、ファイルを閉じた。

視線を画面から宙に向け、天井を睨みつける。

もう、あの頃の自分とは違うのだ。

場数も踏んだし、買収に関してのノウハウは父よりも豊富だという自信もあった。

「任せてください」

経営向きとはお世辞でもいえないこの羽並という経営者に立ち向かうため、

僕は気合を入れた。

―― まったく、社長はどうしてこの面子を揃えたんだ――

目の前にいる買収スタッフを見つめながら、僕は呆れ返っていた。サングラスに額の剃り込み。

どこから見ても強面なふたり組みで、おまけに白いスーツときている。

そのふたりにサングラスを外させた僕は、さらに驚いた。

ふたりは、FIE東日本エリア、西日本エリア各支部の代表だったのだ。

数年前までは買収を専門に行っていた。

もちろん、僕も彼らを知っている。本当は、こんな姿など出来ない頭が切れ常識あるスタッフだと。

「随分会わない間に服のセンスが変わったようですね。

あなたたちのファッションにとにかく言いたくは無だけれど、それはどう見ても相手を脅している格好にしか見えない」

あまりにもその格好が気になってしまい、

話を中断しそんなことまで言ってしまった。

だが、彼らの答えに驚く。

「すみません、副社長……。これは社長の命令で」

「えっ！社長が」

まったく、何考えているんだと呆れてしまった。

きっと、手っ取り早く威圧して買収を成功させようと言う魂胆だったのだろう。

突拍子もないのか単純発想なのか、

時々我が父ながらその考えが分からなくなる時がある。

「わ、分かりました。今後は普通のスーツをお願いします」

「はい」

なんだか穴に入りたいくらい恥ずかしい。

僕は、咳払いをすると大人しく彼らの申し送りに耳を傾けることにした。

「……と言うことは、そのはなみ花屋の店主は買収に関して、全く聞く耳を持たないということですね」

資料を見ながら驚いたのだが、

この頑なに拒否を続けている買収相手、羽並葉子。

年は若く、病気の母の面倒を見ながら店の経営をしているという。

自分らの首を絞めるような店でも思い入れが強いようで、売らないの一点張り、

いつも門前払いなのだという。

「流れは分かりました。じゃ、後は僕が引き継ぎます。

あなたたちは、社長の指示に従ってください」

「はい」

ふたりの背中を見送った僕は、課長へ声かける。  
いつも僕の気持ちを理解してくれる片腕みたいな年上男性山口だ。

「車をつけてもらえるか。商店街に行こう」

僕は、頑固者の店主、羽並葉子を見るため立ち上がる。  
気持ちがワクワクする。

果たして何日で落とせるか……ちょっとしたゲームだった。

### 第3話

「これはこれは、副社長さま。こんな小汚い定食屋によっこそ」

はなみ花屋の真向かいにある小さな定食屋は、  
こんな昼時にもかかわらずひとりの客も来ていなかった。  
名刺を渡すと自分を殿様扱いする店主。

時代劇の悪代官のような腹黒そうな顔に、清掃が行き届かない店内。  
普段ならば椅子に着く前に即バックとなるのだが、  
目的を果たすためには、我慢するしかなかった。

「山口、ついでだからお昼にしよう。僕は、そうだな焼き魚定食」

「それでは、私はハンバーグ定食で」

さすがに焼き魚で不味いものは出てこないだろうと思った。  
魚を焼くぐらい誰でも出来るだろうと。

だが、そんな考えが甘かったことを

店主が焼きにかかってから知られることになったのだ。

近所に魚屋があるのに、なぜかその魚は新鮮ではないようで  
目に沁みる煙は出てくる、焼け焦げた臭いはしてくるわけで、  
食べる前から食欲が失せきってしまうようだ。

「店主？」

「はい、副社長さま」

僕は、カウンター向こうで魚を焼く店主に声をかける。

「その魚は、魚住鮮魚店の魚なのか？」

その店主は、自信ありげに答える。

「この魚は、駅向こうのやつですよ。魚住のなんか高くて買えません」

ようやく理解した、お買い得品の魚を平気で客に出す店主。誇りを捨ててしまった料理人に、深いため息をついた。

「山口。ちょっとタバコを買ってくる」

「じゅっくり」

イラつく僕をなだめる様に、山口は穏やかに返事をしてくれた。

煙の立ち込める店を出て、僕は外の空気を思い切り吸い込んでいた。

あまり効果は無いと思うが、気持ちスーツを叩いて、焼き魚の臭いを取る。

「まったく、なんて商店街だ。店主の自覚がなさ過ぎる」

午前うちに買収済みの店を全部回り、  
担当者が交代したことを説明して回った。

どこの店もやる気が無い店ばかりだった。  
文房具屋には埃を被った商品が置いてあり、  
駄菓子屋は、数種類の菓子が置いてあるだけで、  
幼児でさえも楽しむ喜びは湧かないだろう。

この商店街に一軒しかない服飾店は、  
お年寄りでも着ないであろうセンスの洋服ばかりが飾られてあった。

僕は、タバコの自動販売機の前に立つと愕然とした。  
どれもこれも売り切れサインが付いているのだ。

「腹が立つのを通り越して、呆れるよ」

実際、タバコなど吸わないからあるもので構わないのだが、  
これで商店街として成り立っていることが不思議でたまらなかった。  
同じ客商売をしてる身として恥ずかしささえ感じていた。

無意識にため息が出た。

僕は、売り切れサインが点っていないタバコに視線をやる。  
山口がいつも吸っているタバコは、まだ売りれてはいないようだ。  
それを購入することにした。

迷っているようにゆっくりと振舞う。

全ては、はなみ花屋を偵察するために。

「葉子ちゃん、お漬物持ってきたわよ」

「ありがとうございます！シズさんも来てるんですよ。  
どうぞ、お茶でも飲んでいってください」

ここの商店街の華と言ってもいいかもしれない。

黒い髪をひとつに結い上げた若い女性は、明るい笑顔を見せながら、見るからにお喋りに来たと思われるお年寄りたちを招いていた。

土間から一歩上がった畳の部屋には3人の客が座っており、

花なんか無視して話に花を咲かせている。

店主と言え、その客にお茶をいれたあと、店に出て花の整理をしていた。

「あつ、お代わりは自分で入れてくださいね。私忙しいんですから」

「何言ってるの葉子ちゃん、今日は客来たの？」

「もちろん、ゼロですよ。来るわけ無いじゃないですか！」

ざっくりとバケツに挿されてある花の束を種類別に分けながら、彼女は眩しいくらい笑顔を見せ、声を上げて笑った。

僕は、そんな彼女の姿をじっと見つめていた。

どうしてだろう。

倒産寸前の店を持ちながらも、暗さなど微塵にも出さず働いている店主。

商売っ気の無さには呆れながらも、他の商店街の人とは違うものをその女性に感じていた。

店主は花を取り上げ、手際よく葉を間引きしはじめた。手を加えられた花は、生き返ったように活き活きと自身を主張し始める。

慈しむように見つめた女性は、花をまるで恋人の肌でも撫でるかのように優しく扱っていく。

「彼女は、本当に花が好きなんだろうな」

ふと彼女と目が合いそうになる。

僕はタバコを取り上げると定食屋へと戻った。

「前のはなみ花屋の嬢ちゃんとは、会ったんですかい？  
頑固な嬢ちゃんに買収の話をしに来たんでしょう」

定食屋の店主は、食べ終わった食器を片付けながら、  
答えを返さない僕を覗き込み詮索を始めた。

最終的には金の話になり、

『買収が進むように彼女にはもつと金を出すんでしょ』と勝手に話を膨らませてゆく。

そんな店主の興味深げな視線を無視し、窓の外に視線を移した僕は、  
誰もいなくなり灯が消えたような花屋の店先を眺めていた。

「でもね、まだ若いのにあんな売れない店の犠牲になって。  
可哀想な娘さんではあるんですよ」

「犠牲？」

店主は、僕が反応したのが嬉しかったのか得意げに話し始めた。

羽並の父親は、花屋に婿に入ってからモトラブルの種だった。

店を手伝うこともなく、ギャンブルや女癖が悪くて借金ばかり作り、  
娘が産まれて収まるかと思えば、酒びたりの日々で。

結局は、三行半を押されて出て行ったきり、行方知れずになった。

借金は、小さな花屋の経営だけで返せるはずもなかった。

また、商店街の不景気で額も膨れ上がり……。

「母親も5年前に癌を宣告されて、で1年前に再入院。  
親戚の看護師から聞いた話、あちこちに転移しているらしくて、

先は長くないらしいんですよ。  
あの嬢ちゃん元気がいいから、そんな風には感じさせないんですけどね」

「母親が死んだら天涯孤独の身」そう付け加えると、  
定食屋の店主はカウンターの向うへ消えてゆく。

「そんなこと、ペラペラと他人に話すもんじゃないだろう…」

花屋を見つめながら心に溜まった淀みを吐き出した。

「あの親父も、不幸事の噂を流して楽しんでいるようにしか見えな  
いな」

この商店街を担当して分かったこと。

それは、薄っぺらな絆で結ばれているということだった。

土地の買収に応じた商店街の店主たちは、  
口々に買収に応じない3軒の店の悪口や噂を、告げ口のように話した。

一番人間的だと思ったのは、はなみ花屋とともに買収を拒否する店主たち。

それぞれが自分の店に誇りを持っていて、  
もちろん買収に応じた店の悪口なども話すことなく……。

「団結力のないこの商店街に、未来はないようですね」

僕の言いたいことを代弁してくれた山口に視線を戻した。

「そうだな……これで、遠慮なく頂ける」

花屋の店主には悪いが、

このまま経営を続けることは、自分の首をさらに絞めることになる。まだ価値が残っている状態で、FIEが買収することが彼女のためになることだった。

花屋が首を立てに振れば、残り2件の店も自然と手に入る。

あの自殺した老夫婦と同じ人生を歩まないためにも、成功させなければいけないのだ。

「山口、一度FIEに戻ろう。着替えて乗り込む」

高級スーツでも、こう焼魚臭くては仕事にならない。

「親父、つりは要らないから」

立ち上がりテーブルに札を置くと、僕は店を出た。

## 第4話

「久し振りね、元気にしてた？」

「ああ。君は？」

「もちろん元気よ」

首をちょっぴり傾け、大きな黒い瞳をゆっくりと細めた亜紀の微笑みは

あの頃とまったく変わらない姿だった。

細いうなじから垂れた後れ毛は、彼女と過ごした甘い日々を思い出させ

僕の胸を切なくさせる。

きっと、彼女はそんな僕の複雑な想いなど気付かないことだろう。

「真純くん、休暇なの？」

「いや、こっちの買収をすることになってね。急遽、戻ってきたんだ」

「えっ！そうなんだ……」

彼女が驚くのも無理はない。

亜紀は、啞然としていたが僕の視線と交わると眉を下げ苦笑した。

「なんか、皮肉なものね。願っても願っても帰って来れなかったの

に、

別れた後になって帰ってくることになるなんて」

「そうだね」

ふと、ふたりの間に懐かしい雰囲気が漂っているのを感じた。

思い出という記憶がもたらす懐かしい感覚。

閉ざしたはずの心の内から、いろんな記憶と想いが溢れてくるのを感じ慌て始めていた。

「平井は、まだ『GUCCI』に勤めているのか？」

このままだと、復縁を求めてしまいそうになる。

話を反らすために話題を変えることにした。

「ええ、そうよ。あ、そう。あなたも知っているでしょう

ラッシュが製造中止になるってこと」

「ああ、知ってる。愛用者としては、困るよ」

GUCCI rush for men .

長年お気に入りだったメンズ用のフレグランス。

香水っぽくない香りとボトルのセンスよさでずっと使っていたのだが、

ボトルを倒すと液がこぼれるとの理由で製造中止になるらしい。

「私、ヨーロッパに旅行に行くから探してきてあげてもいいけど」

「今年も行くんだ……」

去年ふたりで行った旅行を思い出す。

今年はひとり？なんて女々しいかもしれないが、そんなことを訊ねそうになる自分がいる。

そんな僕の気持ちを見透かされたように亜紀は付け加えた。

「向こうに行って、ウエディングドレスを作ってもらうの」

「えっ？」

頭が混乱していた。

彼女の言った意味がしばし分からず、亜紀を見つめたままポカンと口を開けていた。

「私、結婚しようと思って」

ようやく、頭が正常に働きだした。

彼女は、僕以外の誰かと結婚するためにドレスを作りヨーロッパに行くのだ。

「相手は、デザイナーよ。アクセサリーのデザインを描いているの」

「ちょ、ちょっと待てよ。結婚決めたのか？」

別れてすぐに付き合いだしたとしても、1年も付き合っていないことになる。

「つきあつて3ヶ月かしら」

「3ヶ月だつて！」

思わず僕はテーブルを叩き、立ち上がっていた。

世の中には、電撃的に結婚する奴なんてたくさんいる。

だが、彼女の慎重な性格では考えられないくらいの早すぎる決断に待ったをかけたくなつたのだ。

「真純くん、声が大きいわ。あなた副社長でしょ、油売ってるって思われるわよ」

FIEロビーの一角に設けられた休憩スペース。

さすがに声が大きかったようで、周囲の視線を一身に集めてしまっていた。

「構わない。僕が副社長だなんて、このフロアーでは誰も知らないことだ」

大きなため息をつきながら、身体の力が抜けたように椅子へとへたりこんだ。

シヨックだった。

亜紀と別れたと言つても喧嘩別れのようなものだった。

再び出会えばまた愛の炎が燃え上がる…そんな甘い期待を抱いていた。

だが、彼女がよその男のものになる。それが、現実なのだ。

「愛してるんだ。その男のこと」

亜紀は、その問いにじつと僕の瞳を見つめ返した。

「結婚するには最適な人だと思うわ」

なんだよ…それ。愛してるかって聞いたのに。

普通、結婚が決まったら幸せそうな顔をするだろう。

嫌な予感が心に過ぎる。

まさかと思ったが、沸々と沸きあがってきた思いをぶつけてみた。

「会いたいときに会えるから結婚を決めた……それだけじゃないよな、……亜紀」

「それだけじゃいけない？」

「えっ」

「別れたあなたには、関係ないことでしょ」

苦笑しながら立ち上がった亜紀。

僕は何も言えず座ったまま彼女を見送ることしか出来なかった。

「真純くん……愛してる」

「僕もだ……亜紀」

長い悪夢を見ていたのかもしれない。

僕らの仲は今でも変わらず続いているのに、  
どうして彼女が他の男と結婚するなんて夢を見てしまったのだろうか。

僕は彼女の白い腕に手を伸ばした。自分の元に引き寄せるために。

プルルルル……！！

突然、ふたりの仲を断ち切るような電話の音に全身がびくりと揺れ、  
目を開けた。

全てが夢であったことを目の前に見える紫檀したんの天井で気付く。  
それは、ホテルの寝室で。

「はい……亜紀？」

覚めない頭を振りながら、僕は受話器に話しかけた。  
その奥から繰り返し流れる英語のモーニングコールは、  
一気に脳を目覚めさせ、現実を突きつけてくる。  
そして、なんともいえぬ空しさがこみ上げてきた。

「馬鹿だなあ……未練タラタラじゃないか」

鉛のような身体を起こし室内灯をつけると、紫檀で統一されたアジア風の室内を今一度確かめるようにゆっくりと見回した。

頭にはズンと重く押し掛かるような痛みがある。

二日酔いだ。

そう言えば、亜紀から結婚宣言を突きつけられた僕は、凄いショックを受けた。

FIEでの顔見せが終わったあと商店街にも寄ることなく、ホテルのバーへと向かったのだ。

迷惑だったのは山口だろう。

無理矢理付き合わされ、酔っ払いの面倒を見させてしまったようだ。

その名残として、ベッドサイドのテーブルにはOFFになった携帯電話と

彼からの手紙が残されてあった。

―― 緊急連絡は、私が受けますのでゆっくり休んでください。

山口 ―

普段、深夜まで営業する各地のスポーツクラブのトラブルを把握するため

携帯電話は常時取れるようにしている。

それをOFFにするときは、病院に入院するか山の頂上にいる時。その電話を切られたということは、

電話の対応が出来ないほどに、正気を失っていた事を表していた。

「ああ……」

ぐでぐでんに酔っ払い、愚痴を話す自分の姿が思い浮かぶ。  
自分の不甲斐なさに頭をくしゃくしゃと掻き<sup>むし</sup>筆る事しか出来なかった。

『仕事と私どっちが大切なの！』

雨音のようなシャワーに混じり、あの時の亜紀の悲痛な声が聞こえてくる。

長期出張のために千キロの遠距離恋愛になったふたり、  
結局は心のすれ違いを起こし別れたのだ。

冷たい雨が降るクリスマス。

大切なのは君だと伝えていれば未来は変わっていただろうか。  
彼女だつてこの究極の選択に本音を求めていたのではなかった。  
ただ、結婚が進まぬあの頃の状況に苛立ち感じ、愛を再確認したか  
つたのだ。

だが、僕はその意味を理解してやる事が出来なかった。  
とんぼ返りでも恋人に会いに帰って来ること自体が、

十分な愛を見せているのだと勘違いしていた。

『君は大切だ。だけど、それと同じくらいに仕事も大切なんだ』

『でも、あなたは仕事ばかり優先してる。』

今年私とあなた何時間一緒に過ごしたか分かる？ 42時間よ！』

巷の恋人より、はるかに少ない時間だということぐらい分かっている。

責められているような気がした。恋人を省みない男なんだと。

『じゃあ、どうしろというのか？』

副社長なんか辞めてサラリーマンでもなれって言うのか？

それともフリーターか？僕は、少ない休みを精一杯君に使っているつもりだ。

それでも駄目なのか！』

『駄目よ！会いたいときにあなたはいない』

喧嘩腰になっていた。

お互いが意地の張り合いで、そして、彼女はふれてはいけない言葉を発してしまった。

会いたいときに会う環境など、今の立場の僕には出来ないことだったのだ。

『だったら、近くにいてくれる恋人でも探すことだな』

興奮している彼女にお灸を吸える目的で言った言葉。

だが、それが禁句だということに気づいた時は後の祭りだった。パチンと乾いた音がした後から左の頬に灼熱感が走った。

彼女から思いつき叩かれたということが分かるまでに、結構時間を要したような気がする。

『分かったわ。そうする』

別れの言葉も言い合っていない。  
それが本当のさよならだと知ったのは、彼女が携帯の番号を変えたときだった。

「あ、母さん。連絡もせずにごめん…帰るのは、夜中になりそうだよ」

出張先からFIE本社に戻り、結局はあんなことがあってふらりとバーへ。

ONにした携帯を手にし、心配しているであろう母へと電話するとやっぱり怒られた。

「えっ？真美の病院は今日行くつもりだけど……。  
お見舞いは花束がいいって？そんな催促するくらいなら、元気はい

「いみたいだね」

妹の真美は、季節の変わり目になると喘息の発作に襲われる。今年も、来年の大学受験のために受けた塾の夏期講習の疲れが残っていたようで

大発作を起こしてしまった。

一番辛い時期に真美のそばにいてやれない。亜紀の立場と重なり、胸が苦しくなる。

「花束は、途中の花屋で作ってもらうよ。じゃ。」

…… ああ、分かってるさ。無理はしない」

『仕事ばかりしていると身体にも悪いし、女性からも煙たがられるわよ』

そんなことを切り際に言われてしまった。

なんだか、胸にチクリとくる言葉だ

母との電話を終えた僕は、テーブルに携帯を置くとクローゼットを開いた。

広すぎるスペースには、カバーに包まれたスーツ、そして、私服が並んでいた。

魚臭かったスーツを見ると亜紀や母の言葉を思い出す。

―― 結婚するには最適な人だと思うわ ―

―― 仕事ばかりしてると……煙たがられるわよ ―

「……仕方がないじゃないか。これが僕の選んだ道なんだから」

母が倒れ、半身麻痺になったのをきっかけに思い立ったスポーツクラブ、

それを父が形にするまでさほど時間はかからなかった。

健康増進を目的に来る人や身体になんらかの障害を持つ人のためにさまざまなプログラムを作ったことで客足は増え、

各地に支店も増やした。だが、それで満足することは出来ない。

気軽に通える施設を造るには、まだまだ資金も土地も必要なのだ。そのためには、不眠不休で頑張るしかなかった。

いつまでも感傷に浸っている時間はなかった。

僕は、スーツに伸ばそうとした手を止めた。

一瞬躊躇するが私服を取り出す。腕に袖を通し、

ドレスシャツのボタンを留めてゆくと脳裏に

今日の仕事相手、羽並葉子の顔が浮かんだ。

スーツ姿で門前払いされるのなら私服で会えばいいという考えが浮かんだのだ。

同じ交渉台に引き摺り上げる、

そのためだったら卑怯なやり方だと罵られても構わなかった。

結局は彼女の生活のため、そしてFIEの目的を知ってもらったためだった。



## 第5話

「じゃ、行ってくる」

僕は、車に山口を残し小さな路地に立った。

この角を曲がれば商店街。はなみ花屋がある。

あの小さな土地を必ず手に入れてみせる……そう自分に言い聞かせシャツの襟元を整える。大きく深呼吸をすると心のざわめきは取れ仕事モードになった。

まるで戦いに向かう武者のように心の中は鎧で固めて。

「い、いらっしやいませ」

羽並葉子は僕を見るなり、頬を赤らめ天然記念物でも見るような視線を向けてきた。

それは思ったとおりの好感触で、今まで幾度も感じた事のある熱視線を

僕のひとつひとつの動作に向けてくる。

男を見るなり、いきなりラブモードのスイッチが入る子も珍しい。

中学生の初恋のような単純な仕草に、思わず笑いが噴出しそうになっていた。

「今からお見舞いに行くんだけど、適当に作ってくれるかな」

後は、そのまま会話を続けたらいい。

「女性の方ですか？」

「ああ、高校生の妹が入院してね。そうだな、値段は気にしないでいいから、

その淡色のピンクの薔薇を使って仕上げてくれないか……あ、籠はよしてくれ、

いかにもって感じで恥ずかしいから」

いかにも花束というのだけは、止めて欲しかった。

昔、母の快気祝いで花束を頼んだ時、籠にこんもりと花を盛り付けられ

ピンクのどでかいリボンを飾られた事があるのだ。

当時学生だった僕は周りから好奇の目で見られるわ、

自転車の前籠にも入らず、四苦八苦するわ、最悪の状況だった。

その後、必要性に迫られて作ってもらった花束も、仰々しすぎて

花屋に置いてきてしまった過去がある。

花屋のセンスなんてどこでもそんなものだと思っている。

果たして、いかにもという僕の注文に、彼女がどこまで答えてくれるか

……少しばかり楽しみであった。

「そうですね」

店主は、腕を組み首を傾げ、花で溢れんばかりのショーケースを眺め始めた。

花に目を向けた彼女の瞳は、仕事モードに変わったようで、宝箱を見つめるようにキラキラと輝き出した。

「……じゃ、淡い系のピンクと白薔薇を使って、ちよつとアクセントにイングリッッシュアイビーとスプレングリーで和紙で包めばいい感じです」

彼女はそう言うと、人が変わったようにテキパキと動き出した。テーブルに和紙を広げ、裁ちバサミでスツと切つてゆく。

見事な裁ちさばきに見とれているといつの間にか選ばれた花達がドサリと僕の足元にあったバケツに入れられた。

もう、彼女の視界には僕の姿など入っていないようだ。

花のアーティストと名づけたいくらいに彼女の小さな手の中では花が踊っている。

無造作に束の中に差し入れられてゆくようにも見える1本1本の花は、

最終的には計算しつくされた彩の中に収まっていった。

「いかがでしょうか」

彼女はそう言いながら、花束に薄い緑の紐を巻きつけて僕に手渡ししていた。

リボンの代わりに施されたその紐は目を揃えて編み込んであり、四つの凸凹が、センスよく花束をまとめていた。

良い仕事をしていることがその花束全体を見てすぐに分かった。

「へえ、もつと派手なりボンで結ばれると思ったけど、紐で結うというのもお洒落だね」

これは、本音トークだ。アレンジメントの意外な取り合わせ、柔軟なセンスの持ち主に頑固者というイメージが少しばかり崩れる。

「そう思って、手芸などで使われる紐結びであしらってみました。紐自体は特殊なものを使っているので、高級感是十分に出ていると思います。」

ちなみに、これは四葉のクローバーをモチーフにしています」

ああ、なるほど。飾りだけじゃなかったんだ。

僕は、彼女からその珍しい紐に視線を落とした。薄い緑の紐で細かく編み込まれた

紐結びをまじまじと見ながら、彼女の器用さと人の心を上手く掴んだ感覚に胸が震える。

闘病生活をしている患者は、誰しも辛さを抱えている。

さり気なく飾られた幸せを願う四葉のクローバを見て悪い気を起こす人間なんて、

どこにもいないだろう。

だって、彼女から受け取った僕でさえもなんだかワクワクとした気持ちに

なっているのだから。

「幸せの四葉だね」そう言って僕は、彼女を再び見つめた。

彼女はパツと頬を赤らめ僕を見返す。その時間は短いはずなのに、

なんだか長く感じた。

「はい、妹さんが元気になりますよう思いを込めてます」

「ありがとうございます。いくらかな」

「税込みで6000円です」

「それでいいの？花束にしては大きくて結構いいもの使ってあるよ  
うな気がするけど」

花の相場を調べていた僕は、この値段に愕然とする。  
仕入れ値にちよつと気持ちを足した値段。

こんなんで借金を返そうだなんて、とんでもない話だ。人が良すぎるのか、

計算が出来ないだけなのか、現実が分かっていないのか…身内だったら今頃説教だ。

そんな思いも彼女は気がついていないだろう。全く暢気な奴だった。

そんな暢気な彼女は、屈託ない笑顔を僕に見せた。

「はい、よろしければまたいらしてください」

説教する気も失くすほど、彼女の瞳はひたむきだった。

「ありがとうございます」

僕は、花束を持ち花屋を後にした。

「なんだかやりにくいな……」

それが、羽並葉子の第一印象だった。

## 第6話

何事にも消極的な妹の真美があんなに興味を示したのは、この花屋の花が初めてだった。

『花を持ったお兄ちゃんって凄くかつこいい』

……から始まり。

『どんな人が作ったの』

『ねえ、この紐って手作り？』

まだ身体の調子は完全ではないと言うのに、身体を起こしてまで話しかけてきたのだ。

『私こんなお花屋さんで働きたいな』

最後に言った前向きな言葉は、消極的な妹の心がこの花によって変わりつつあることを表していた。

彼女の不思議なパワーが込められたこのアレンジ。

僕は羽並のアレンジをもっと知りたくて、あれこれと名目をつけながら

はなみ花屋へと通った。

「えっ？名前」

店主より声をかけられ、

そう言えば、自分の素性を伝えていないことに気付いた。

最近は、仕事モードというよりプライベート的な感覚でこの店を訪れていた。

毎日の忙しい時間の中、この古ぼけた花屋のこの丸椅子に座るのが唯一の楽しみになっている。アンティークショップでしか存在しないだろう

振り子時計の時を刻む音を聞きながら目を閉じ、彼女の創作音を感じながら

ゆったりとした時間を過ごすのが癒しになっていた。

なんだか居心地が良過ぎて、名乗るタイミングを逃していたのだ。

時間はあるようで無い。

早く彼女を舞台に上げて交渉を始めないといけないのだが

……なんだか踏み込めない。

羽並葉子は、『別に深い意味はないんです』と顔を赤らめながら

『いつもお客様と呼んでるばかりで、堅苦しいような気がして……』と付け加えた。

彼女の花に、魅力を感じる訳がなんとなく分かった。

嘘がつかないタイプの彼女、僕への感情もこうやって表情が表してくれる。

それと同じように、彼女のアレンジは綺麗に作るというよりも相手に感じたままを花束にぶつけているのだと思った。

元々持っているアレンジの高度さと、彼女の客を思う気持ちがプラ

スされ花束は作られてゆく。

自己満足でないから、相手にも素直に受け入れられるというわけだ。……ということは、自分がFIEの副社長だと名乗れば、必然的に花束の雰囲気も変わってくる。それを想像すると残念に感じた。

「僕の名前……？真純って言うんだ。

真実のしんに、純粹のじゅん……。君は？」

僕は、自分の口から出た言葉に驚いていた。

FIEだと分かる恩田の姓を名乗らず、名を名乗ってしまったのだ。この店が持つ平和的な空気に完全に侵されてしまっている。もう少しこの穏やかな時間を……と僕の心が求めている。

「わ、私ですか？羽並と言います！！羽毛のうに、牛井の並です」

――へっ？

彼女の自己紹介に凄く違和感を感じた僕は、彼女をジッと見つめ返していた。

百歩譲って、羽毛の『う』はまだましでしょう。

だが、牛井？

僕だって、牛井屋がどんなところか知っている。

一度きりだが、山口より連れて行ってもらったいわゆる庶民の店だった。

『ナミツユダク』というまるで宇宙語のような言葉を話す彼に、結構なカルチャーショックを受けた気がする。

『牛井の並です』

……彼女の言葉が重なる。

僕は、羽並葉子の飾り気のなさに驚いた。

普通、女性だったら、自分の説明にそんな安っぽい表現などしない

……。

興味ある男性に、そんなことを言うなんてありえないのだ。

場を盛り上げるためだったら分からなくはないが、彼女はまるで

教師から言い当てられた子供のようにカチンコチンに緊張している。  
計算し尽くされたとは到底思えない彼女の言葉と姿

……恋愛ベタな羽並葉子の姿は、僕の笑いのツボに入ってしまった

「牛丼…並か。それはいい」

僕の笑いにきよとした表情をしている彼女は、ようやく意味が  
分かったようで

つられて笑い始める。

そんな表情も面白すぎた。

僕は、腹を抱えながらふと感じた。

女性の前で、こんなに弾けて笑ったことなど初めてだということを  
……。

## 第7話

この花屋へ通う度に、  
自分の立場が仕事だけではなくてきていることを感じた僕は、  
焦っていた。

羽並へ対する思いがおかしいと確信したのは、彼女が花の棘で怪我をした時。

指先から赤い血が滲んでいるのに、なんと彼女は、ビニールテープで自分の指を巻こうとしたのだ。彼女の仕事に対する熱心さは今まで  
のことで

十分に分かっている。そんな自分を省みない行動に、僕は待ったをかけた。

「君、何やっているんだ！雑菌が入ったらどうするんだ」

そう彼女を叱りながら、僕は彼女の傷ついた指を口に含んでいた。

『どうして、こんなこと』と、心が彼女に問いかけている。

雑菌が入って指が使えなくなったら、君の好きなアレンジが出来なくなるんだと。

土地を奪うだけなら、彼女の指がどうなろうと関係ないはずだったが、僕は自分の意志で彼女の技を守っていた。

――もしかして？――

自分への問いに返事を返す暇もなく、その行為は魚住鮮魚店の店主に遮られ、

羽並に僕の正体を明かされることとなった。

我に返った僕は、外れきっていた心の鎧を整え直す。

だが、彼女を煽ってみても冷たい態度をとってみても、

僕の行動はカラカラと空回りするばかりだった。

それからの僕は、父に止められながらも、FIEの施設の中に花屋を入れる計画を進めていった。自分では、もう止められない状態だった。

『羽並へ向けている情は、あの自殺した老夫婦に向けていたものと同じ…それ以上だ』と

父に指摘されても、それが最善策だと押し切った。

『痛い目に合うぞ』

『そうなったら、全責任は僕が持ちます』

情を上回る何らかの気持ちだが、全速力で僕の背中を押してゆく。さすがの父も、お手上げ状態だったのだろう。

『真純、買収相手に恋でもしたか』

『えっ？』

『恋は盲目……ってやつだ』

父は、このとき僕の心を見透かしていた。

僕自身、その気持ちに気付いたのは、病院の階段の踊り場で彼女の本当の姿を見たときだった。

妹の見舞いのため、病院の階段を上がった僕は、踊り場で羽並葉子を見つけていた。

彼女は全く気付いていない。声をかけようとして、ハッと息を呑む。日頃の、明るい羽並葉子の姿はそこになかった。

彼女の背中力はなくなり、小刻みに振るえていて……泣いていた。あの定食屋の店主が言っていた事が思い出される。

彼女の姿からすると、それは本当のことで母の容態は最悪なものと推測された。

『母親が死んだら天涯孤独の身』そう最後に言った定食屋の言葉が、彼女の背中に重なって胸を切なくしてゆく。

あの老夫婦の件以来、そんな気持ちになることなどなかった。買収相手の土地や金に関することには興味があっても

家庭の詳しい事情など、買収には関係のないことには知らぬふりをしていた。

羽並に同情しているだけだと言われたらそれまでかもしれない。だが、彼女の震える背中をこの身体で包み込みたいと思ってしまう

のは、  
もう同情の域を越してしまった証だった。

― 僕は、彼女に恋している ―

頭の中でそう言葉にすると、心の中につつかえていた何かが外れ  
気持ちが楽になった。

― そんな、泣きはらした顔をお母さんに見せるのか。お母さん、  
辛いだろう ―

ほとんど身内のような感覚。

僕は痛む胸の内で、そう彼女の背中に訴える。そして、声をかけた。

「あれ？葉子さんじゃないか」

僕は、彼女の涙を止めるため、おどけたピエロになることにした。

僕たちは、病院を後にしていた。

羽並の母親は、彼女に似てとても気さくな人柄だった。僕らの関係を思いつきり勘違いしていたが、それを別に訂正したいと言う気も起こらなかった。

なんだか、身内のような暖かいひと時を過ごさせてもらった。

羽並の母親の前でも、そして、僕の妹真美の前でも、

羽並は悲しみを心に閉じ込め、明るく接していた。……そんな彼女が愛しくてたまらなかった。

「今日は、ありがとう。紐の組み方まで妹に教えてくれて、

真美は身体が弱いからどうしても気持ちが入ってしまっただ。君のお陰でこれから外に目が向きそうだよ」

花束の作り主の出現に大喜びした妹へ、羽並葉子は四葉をはじめ紐の組み方を幾種類か教えてくれたのだ。

「うちの母を楽しませてくれたお礼と、あなたと違って気の優しい真美ちゃんのためよ。」

決して、あなたのことを認めたわけじゃないから」

「別に、認めてくれなくていいよ」

羽並葉子のこのひと言は、敵同士という現実には立ち返らせる。

プライベートから、現実に戻るこのひと言を言わせているのは、紛れもなく僕だった。

――それがなければ、僕たちの仲はなかなかいいものなのに――

自分の立場がうっとおしくてたまらない……僕は、自分の感情に驚いた。

プライベートが、仕事を呑み込みはじめていたのだ。プライベートと仕事の危ない綱渡り、共倒れというシナリオが見えてくる。この買収が上手くいかないということは、

彼女の借金が膨れ上がり、二進も三進もいなくなる姿を暗示させた。

最悪、彼女の技を殺してしまう。

そんな道だけは、阻止しなければならなかった。

早く、買収の土俵に上げなければいけない。

彼女を乗せるため、玄関前の駐車場に止めてあった

車の助手席のドアを開いた僕は、彼女に言った。

「ただ僕は、君の泣きはらした顔を病気のお母さんに見せたくなかっただけなんだ。

お母さんの病気、重いんだろう？」

敵のプライベートなんて、簡単に把握できて利用できるんだと彼女に、勘違いさせるためだった。

「あなた、私のことを調べたの。土地のため」

買収話に彼女を向き合わせるため、お母さんを利用した。

そんなこと、昔の自分なら平気でやりのけていたのに、今は胸が痛い。

だが、交渉台に踏み込ませるためにはこんな荒治療も仕方がないのだ。

「そんなことまで分かっているんだったら、同情して買収を諦めなさいよ。土地なんて腐るほどあるでしょう」

案の定、羽並は、僕のまいた餌に食いついてくる。

「同情で仕事は出来ないよ。人の悲しみを聞いていちいち同情するくらいなら、今、君の前にはいない。君が怒るからしないけど、本当は、癌のお母さんも利用させてもらいたいくらいだ」

『癌である母親を利用したい』

その極めつけの言葉で、彼女はFIEに宣戦布告してきた。僕に対して敵だと断言する。

彼女を交渉の舞台に引き摺り上げた……全ては思惑通りなのに、逆にどんどん悲しくなる自分がいた。なぜ、好きな人とこんな戦いをしなくてはならないのか  
と心のバランスがグラグラ揺らぐ。

僕は焦っていた。

彼女へ、自分がここまでする理由を知ってもらいたいのだ。

僕は、敵地であるFIEを見せるために彼女を無理矢理車に押し込んだ。

それは余計に彼女の興奮を助長するものとなり

……そして、羽並葉子の悲痛な叫びを聞くことになった。

「なにをするのよ、電車で行くからほつといて！もう、私の心を乱さないで、

敵だったらもつと冷たくして！あなたの車なんかには乗せないで、ふたりつきりなんて、もうよして……辛すぎるのよ」

彼女も、僕への思いと買収を拒否する心との狭間で潰されそうになっていた。

僕の心のバランスは崩れ去り、プライベートは仕事を呑み込んでしまった。

「僕だって……」

「えっ？」

彼女は、僕の異変に大人しくなり、涙でぺとぺとになった顔を向けてくる。

「……ふたつの立場で、身を引き裂かれそうな思いだ」

買収相手に告げた思い。

父の言うとおりこの思いが災いして、買収が出来なくなるかもしれない。

だが、僕は心に決めた。

仕事とプライベートを両立してやる……と。

吹っ切れた僕は、羽並葉子へ積極的にアプローチをはじめていた。



## 第7話（後書き）

私の彼は副社長 第15話からのお話となります！

## 第8話

―― 25歳になったと同時に……開けて。

葉子から貰ったラッシュをナイトテーブルの上に置いた僕は、ふかふかのベッドで眠る彼女の額にキスをした。寄り添いかけていた心、アルコールの力も手伝ってか、僕らが両思いになるのにさほど時間はかからなかった。

クリスマスイブに彼女を誘いホテルへ、だが、告白後思わせぶりの態度まで示していたのに、結局はFIEの緊急連絡で彼女を独りにしてしまったのだ。

本心、僕が帰る頃に葉子はいないと思っていた。恋人達のクリスマス、そんなときに独りにされる空しさぐらい理解できる。

そんなことの積み重ねで、僕は元カノの平井に振られたのだから。

しかし、彼女の寝顔はそんな空しさを感じさせないくらい幸せそうだった。

もしかしたら、彼女だったら本当に僕の立場を受け入れて付き合ってくれるのかもしれないと思った。未永と一緒に居られる女性じゃないかと。

「僕は、君を守るよ。大切にする」

「う…ん」

「葉子さん？起きてるの」

彼女は、ごろんと寝返りを打つとまるで子犬のように丸くなった。再び寝息を立て始める。広いベッドに小さく丸まる彼女はとても可愛くて、

僕は彼女の横に添い寝した。髪を何度か撫でると、彼女の頭の下に自分の腕を差し入れた。

きつと、朝起きた彼女がこの姿を見たら顔を真っ赤にしてはにかむだろう。

僕から彼女への、サプライズなプレゼント返しだった。

「まったく」

次の朝、目が覚めたら葉子の姿はなかった。

一瞬、サプライズなプレゼントが気に入らなかったのかと思ったが、テーブルに置かれた手紙を見てちよつと安心した。

――素敵なクリスマスをありがとう。起こさないで帰ります――

遅くに帰って来た僕を気遣ってくれた、彼女らしい心遣いだったが、チラリとも顔が見れなかったことになんだか子供のように怒りが湧

く。

ロスに行く前に、彼女の顔を見ておきたかったのに。

……そう拗ねるのは、僕のほうが彼女の虜になっているからだった。

「ああ、母さん」

FIEの玄関に、車が横付けされた。

母からの電話を受けながら、FIEの受付を会釈し通り過ぎる。

初めは、おしゃべりが堪えなかったこの受付嬢も、

短期間の間に気持ちを入れかえてくれ、

今や立派に仕事をこなしてくれている。

「千草おばさまが倒れたって？疲労…今日は会議だから  
明日朝にでも覗いてみるよ。場所は？ああ、分かった」

携帯を切り、エレベーターに乗り込んだ。

ゆっくりと静かな時が流れ、2階へと到着する。

スツと扉が開くと、カウンターにひとりの女性の姿が見えた。

「平井……？」

それは、平井亜紀だった。

## 第8話（後書き）

## 第9話

「平井……どうしたんだ？まだクラブは開いていないけど。平井？」

ショップで出会った時とは違う、一夜にして変わり果てた彼女の雰  
囲気に驚いていた。

肩は力なく下がり、いつもセンスよくまとめている髪もただ黒いへ  
アゴムで

束ねているだけ、僕の声掛けに振り向いてもくれなかった。

そんな彼女の肩を叩くと、覗き込んでみる。

だが亜紀は、顔を見せるのに躊躇しているかのように、全身に力を  
入れ顔を反らしたのだ。

異常な彼女の行動。心配した僕は、彼女の肩を揺さぶり声かけ続け  
る。

すると、観念したようにゆっくりと顔を上げた。

「平井……！」

僕は、亜紀の顔を凝視できずに視線を反らし顔をしかめてしまった。  
彼女の臉と頬は、真っ赤に腫れ上がっていたのだ。頬の形は変わり、  
元々の輪郭の原型は留めていなかった。

「何かあった……ようだね」

出勤してきたFIEのスタッフが増え、フロアでは話が出来なくなる。

興味深げに視線を向けるスタッフより彼女を守るため、3階の僕のオフィスへと

場所を変えることにした。

「インスタントだけど……牛乳を沢山入れておいたよ」

僕は亜紀の前にカフェオレが入ったカップを置くと、真向かいに腰掛けた。

肩を落としたままの彼女は、それをひとくち口に含むと、溢れ出す涙を両手で隠した。

「真純くん……優しいのね」

亜紀は、僕が差し出したハンカチを受け取りながら、「私、独りになった」と呟いた。

「えっ？」

「あの人、二股かけていたの。イブに女性と鉢合わせしたわ」

「ええっ！」

驚いて声をあげてしまった。

それは、婚約者とホテルでディナーを楽しんだ後だった。部屋へと向かっている

亜紀たちの前に、突然女性が現せたのだという。

もちろんその後は、女同士がつかみ合う修羅場となったというのは言うまでも無い。

ふたり我に返ったときには婚約者の姿は無く。

「叩かれたのか？」

「そう」

腫れ上がった左頬を冷やすために、僕は冷蔵庫へと行こうとする。

そんな僕の腕は、彼女により掴まれた。

「今日、一緒にいて欲しい…独りになるといけないことまで考えてしまうの。」

一睡も眠れなくて、気付いたらここに来ていた」

背筋がゾツとした。

彼女の置かれた境遇とやつれたこの姿から、『いけないこと』の意味がすぐにはじき出される。

ここで、彼女を突き放したらそれが現実化しそうで怖かった。

「僕は、今日一日会議が入っている。待てるならば飲みにも行く。」

酒に頼りすぎるのはいけないことだが、今日は癒さないとな。友人として、じっくり付き合ってやるよ」

「友人……」

亜紀は、潤んだ瞳で僕を見続けている。

彼女を前にし、躊躇なく友人と言えるようになった僕は、いつの間にか彼女のことを卒業できていたことに気付いた。

「そう…、分かったわ」

「適当に僕のオフィスで過ごしてってくれ。気晴らしにジムに行ってもいいし

……会議が終わり次第迎えに来る」

「じゃ、行くから」

僕はオフィスを後にする。扉を閉めようとした時彼女が止めた。

「真純くん！」

「なに？」

「昨日の……あの人……」

「え？」

「やっぱりいいわ」

亜紀は、僕の視線を断ち切るとテーブルにうつ伏せた。

夜、オフィスに戻ると平井の姿はなく、手紙だけが残されていた。

― 真純くん、あの店で待ってるわ ―

あの店とは、以前彼女とよく行っていたバーだった。

プライベートルームがあるバーで、しっとりとした雰囲気がお気に入りのお店。

「通用口に車を寄せてくれ」

デスクの内線電話にそう話しかけると、ソファ―に脱ぎ捨てていたスーツのジャケットを羽織る。

内ポケット探ると、亜紀に貸していたハンカチに手が触れた。

会議の間にポケットへ戻してくれていたようだった。

だが、どこを探してもホテルで書き残してくれた葉子からの手紙は見つからなかった。

「あれ？葉子さんからの手紙がないな…落としたかな」

そんなはずは無いのだけれど、そう思いながらも、『なぜ手紙が無いのか』などと

深く掘り下げて考えることなどしなかった。僕は、父の電話を受けながら通用口を出る。

そして、黒塗りの車に乗り込むと、バーで待つ亜紀の元へと向かったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0156z/>

---

真純くんの事情

2012年1月13日13時45分発行